

都市幼児の保育

成田 錠 一

都市の子どもと農山村（研究の対象として比較される農山村は、現在のごとく、いわゆる都市化現象が、中心城市から広く、深く及んでいる状況のもとでは、その選択は、よほど注意しなければならぬ）の子どもたちの精神発達の違いや、或いはそれらをとりまく生活環境の差については、以前から多くの研究が行われてきた。しかしながら就学前幼児を対象とした場合には、それは母親から見た

幼児のパーソナリティの横顔であったり、観察可能な習慣形成の面とか、わずかに社会性の側面を伝える資料が提出される程度であった。加えて、都市におけるその生活構造の多様さから、都市幼児全体の精神的プロフィールを伝える資料も、また、比較的少ない現状である。

そこで我々は、このような都市内部における、団地とか住宅地域とか商工業地域とかいった生活環境の違いも、対象数を注意することにより都市の幼児の全体をとらえ、さらに、直接子どもを対象にし、彼らのパーソナリティ特質を、客観的にとらえることによって、その姿をうかび上らせる試みを行ったので、先ずその研究方法、結果について紹介し、それを足がかりにして、都市幼児及びその保育上の問題点を考察することにする。

都市幼児の姿

都市幼児のパーソナリティ特質を、より客観的に把握するため、投影技術の一種である絵画欲求不満スケッチ（PFT）を使用した。テストについては、手引を参考にされたいが、大略は次の通りである。第1図のごとく、日常幼児にとって誰でも経験する欲求不満場面23によって構成され、個別的に図中の子がどのように反応するかを、被験者にたずね、記録し、それを三方向（外罰・無罰・内罰）と三型（障害優位・自己防禦・要求固執）及びそれらの組合



第1図

せによる13の反応カテゴリーに分類整理したのが表Iである。

又都市幼児の姿をよりはっきりさせるために、比較対象とした山村幼児は、充分検討のうえ、愛知県北設楽郡田口町、同南設楽郡鳳来町の四保育所(内二か所は僻地保育所)の幼児のうち、純粹に保護者が農業及び林業にたずさわる者の五才児90名を選んだ。そして都市幼児については、名古屋市内の住宅、団地、商業、といった地域の幼稚園、保育所五才児の幼児100名を対象とした。そこで我々が都市幼児というのは、団地とか商業地域とかいった特定地域、階層の子どもではないのである。

我々は表Iで示した資料について慎重に検討、考察を行った結果、都市幼児の心的特性の姿を次のごとく結論

反 応	名古屋市及びその周辺			北 設 地 区			名 北	名 北	全 国
	女子(%)	男子(%)	平均(%)	女子(%)	男子(%)	平均(%)	女子(%)	男子(%)	平均
R	49	52	51	56	52	54	53	52	54
I	23	24	24	21	22	22	22	23	22
M	27	24	26	24	26	25	26	25	23
O-D	16	18	17	14	13	14	15	16	20
E-D	53	49	51	53	58	46	53	42	48
N-P	31	33	32	33	39	36	32	36	32
E'	1.4	1.8	1.6	1.1	0.9	1.0	1.3	1.4	1.6
E	5.1	5.1	5.1	6.3	5.4	5.9	5.7	5.3	6.0
c	4.0	4.1	4.1	4.4	4.7	4.6	4.2	4.4	5.4
P'	0.9	0.9	0.9	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	1.4
I	3.4	3.2	3.3	2.8	2.6	2.7	3.1	2.9	3.8
i	0.7	1.1	0.9	0.9	1.3	1.1	0.8	1.2	0.3
M'	1.2	1.1	1.2	1.2	1.1	1.2	1.2	1.1	1.8
M	2.8	2.2	2.5	2.3	2.2	2.3	2.6	2.2	1.6
m	1.9	1.9	1.9	1.5	2.3	1.9	1.7	2.1	2.1
E	4	4	4	6	4	5	5	4	7

表I (N-Pまでは% それ以下は実数の平均である)

項目	重点をお いている 性別 順位	都		市		農		村	
		男		女		男		女	
		%	順位	%	順位	%	順位	%	順位
自分の事は自分で		58.5	1	48.5	1	53.1	1	35.4	2
がまをいわない		9.7	2	17.2	2	9.4	3	38.7	1
嘘をつかない		9.7	2	14.3	3	18.7	2	6.4	4
食べ物の好き嫌いを		4.9	4	8.5	4	6.3	5	3.2	5
危い遊び、悪い遊びを		4.9	4	5.8	5	9.4	3	3.3	5
朝夕の挨拶、食事時の作法		2.5	7					6.5	3
よく勉強する		2.5	7					3.3	5
弟や妹をよくかわいがり面倒をみる		2.4	7						
清潔にしている				5.7	5	3.1	6	3.2	5
その他の		4.9	4						

表 II

づけた。即ち、精神的な、発達も充実し、いわゆる社会成熟の程度も高い。しかし社会的適応のための適度の攻撃性に欠けるところがあり、どちらかといえれば依存的な面が強い。さらに精神発達のレベルの高さに対応する自我強調も、気弱さ、自分の気持ちを押えるといった型で行われている。いかえれば、先生や母親のいうことは、大抵のことがすらすらとできるし、先生や母親にとっては世話のやけない子なの

である。折紙はチャンと折れるし、歌も上手に唱ってくれるし、みんなと一緒に遊びも終りまできれいにやっけてくれるのである。これを年令的に急速に拡大し充実する自我が、母親や先生のいわゆるオリコーチャンの鑄型の中に、調子を合わせ、はめこまれていった姿と見ることはできないだろうか。

オリコーチャンという鑄型

以上のごとき、都市幼児の心理的特性はどこから生み出されてくるだろうか。母親や先生の用意する、オリコーチャンという鑄型は言うまでもなく、いわゆる養育態度であり、しつけの方向である。一般的に言われる、育児過剰、過保護、過大期待といった傾向が、このような型を用意させることになったのであろう。この点について今少し考えてみよう。

しつけ態度については、それが職業、教育程度、社会階層といった文化的要因に規定されるものである。都市内部でも、団地、住宅地、商業地帯で、異った方向が生み出されるが、育児過剰、過保護、過大期待といった点については、都市一般について考えられよう。表IIは東京家政大学・森重敏等の養育態度の調査資料であり、表IIIは名古屋市青少年問題協議会の同様な資料である。このような調査からの結論は、都市と農村との母親の養育態度には差はない。即ち、両地域共母親は子どもの社会的人格を重視しているの

項 目	全体 (634)		男 (326)		女 (308)	
	人数	%	人数	%	人数	%
1. 健康で丈夫にする	539	85%	280	86%	259	84%
2. 素直で明るい子にする	464	73%	231	72%	233	76%
3. 自分のことはできるだけ自分でするようにする	271	43%	135	41%	136	44%
4. 意志の強い子にする	229	36%	141	43%	88	29%
5. 何事もよく考える子どもにする	162	26%	80	25%	82	27%
6. 誰とでも遊べるようにする	141	22%	64	20%	77	25%
7. ピアノとか、バイオリンとか、おどりとか、絵とか、習字など、芸事を習わせるようにする	23	4%	6	2%	17	6%
8. できるだけ文字を覚えたり、数を数えたりできるようにする	21	3%	12	4%	9	3%
9. その他	3	0.5%	2	0.6%	1	0.3%

表 III

あって、この点には何も問題はないように見受けられる。しかし、実際にこのような養育態度が、そっくり、ストレートに、親と子の具体的生活場面に下ろされているのだろうか。この点をもっと掘り下げてみよう。

森重敏等は又同じ研究中で、施設教育への希望という点から教育観の調査を行ない、都市の母親が農村の母親に比べて、子どもの精神面に関心のあることを指摘しているし、名古屋市の場合も同じ研究の他の調査から、母親にとっては、明らかに子どもの知的発達が他の面よりも関心のまよになっていることを報告している。表IVは我々が名古屋市内の幼稚園、保育所を対象として行ったおけいごごとの調査の結果であるが、この事実をうらがきするものであろう。幼稚園や保育所を休ませ、早引きさせてレッスンに通わせ、テストの練習に行かせる母親の気持と、前述のごとき、人格的社会的側面を重視する養育態度の共存という点に問題を見つけないことができない。母親の子供の人格的側面を大切にしなければならぬという気持、願いは、子どもと向かい合った生活の中では、具体的に出てこなくて、ともかく、子どもは、塾やレッスンに行ってもらわねば困るのである。親の言うことをそっくり聞いてくれる子がオリコーチヤンなのである。子どもが嫌がっても、なっとくさせ、おしりをたたいて行かせるのに懸命になることになる。親の言うとおりにあっちへ行ってレッスンを、こっちへ行って知能テストをと、引っぱり

	ピアノ	オルガン	パイオリン	シロホン	洋舞	日舞	絵画	習字	声楽	茶道花	科学	英会話	琴	学習塾	している	いない	計
年少児	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3 (20.0)	12 (80.0)	15 (100)
年中児	2	3	1	2	1	3	9	3	0	0	0	0	0	0	31 (35.6)	56 (64.4)	87 (100)
年長児	34	88	2	11	11	2	45	31	1	1	1	2	2	1	232 (64.4)	128 (35.6)	360 (100)
総計	37	92	3	13	12	5	62	34	1	1	1	2	2	1	266 (57.6)	196 (42.4)	462 (100)

表 IV

まわされる子どもに真の意味での自主性、正しく力強い判断力を期待するのが無理というものだろう。

子どもの方はどうか。都市では、遊び場はどんどん少なくなつてゆき、危険はますます増大する。狭い家の中で、時間のゆとりをもつことができた母親と、むかいあうより手がないのである。柔かい、順応力に富む子どもの心は、そこで、母親の用意したこのような鑄型の中に、ずるずるとはまりこんでしまうのだ。

母親は、一日元気で

みんなと一緒に園で楽しく遊んだり、絵を書いたり、歌を唱つてきたことを賞めないで、書いた絵や、造った作品にケチをつけるのが、大事なことだと思ひこんでしまったのではないか。人間の土台作り、基礎工事が、幼児期のしつけであり、教育であることを、幼児教育の真の意味が何んであるかを知っているはずなのに。勿論このような知的側面の重視は、このしつけ全般にわたつての新しいオリコーチャン主義の噴火口にすぎない。それだからこそ、前述のごとき都市幼児の心の中味をしぼませる結果になつたのだと解釈すべきである。

それでは、なぜこのような鑄型が母親の心に用意されたか。育児過剰、期待過剰といい、母親は、もつと幼児教育にきびしさをといるだけでは、この問題の答にならないし、この鑄型をうちこわすことにはならない。むしろ母親を、かえつて困らせるだけだろう。過剰といわれ、見つめすぎといわれながらも、このようなオリコーチャンの鑄型を用意し、知育偏重ムードに母親を呼びこんだものは何か。一部を除いて大半の母親は、幼児期の保育の中味は何が正しいのかちゃんと知っているだろう。むしろこれは、母親が幼稚園・保育所から大学に至るまでの教育全体のゆきづまりを感じとつた(都市においては特に)ことに由来するかと考えて間違ひだろうか。今や幼児教育の分野にまで及んだ、教育全体のひずみに正面からとり組まねばならないのではなからうか。

正しい方向に向って

テストや進学対策が正しい人間の教育に代りつつあるという、いわゆる教育全体のひずみは、むしろ農村に比べて都市の方がよりはっきりと、よりストレートに親と子どもの両方の上へのしかかってくるだろう。それに団地に象徴される生活空間の狭き、加えてIV表を改めて見るまでもない都市における教育？ チャンスの多きなど。

これらの物心両面での要因から生み出される教育への異常なまでの関心や保育への態度は、ひとりホワイトカラーにとどまらないで、他の職業の家庭まで大きな刺激となって及んでゆくし、また、それが都市における子どもの教育の特徴でもあるのだ。子どもの姿をのびのびとした姿勢に、母親の子どもへの態度を正しい姿にもどすためには、先ず一人一人の先生がこれらの事実をしっかりと見つめることから始めねばならない。

いままで主として母親の側だけについて論を進めてきたが、幼稚園や保育所のごとき幼児教育機関や、その先生が無関係なはずはない。むしろ積極的に正しい姿に引きもどす主役にならなければならぬのだ。何をすべきか。

先生自身子どもに向って、このオリコーチャン主義を押しつけていないか。母親のオリコーチャン主義に便乗していたところがありはしないか。平凡だがやはり今一度、幼児期の保育の、幼児教育の

正しいあり方を確認すべきだろう。さらにその上で、一人ではどうにもならないお母さんたちと、がっちり手をにぎることが必要であろう。園ぐるみ、地域ぐるみで問題とどりくむ以外に方法はないだろう。幼稚園や保育所をオルガン教室に化けさせる前に、先生と母親とでとどくりと保育について話し合ったら明るい方向がひらけてくるのではなからうか。

以上都市幼児の心的特性―母親のオリコーチャン主義の養育態度―先生の教育観といった線で都市幼児の保育の問題を考えてみたが、このように母親のしつけ態度を通して子どもに投げかけられる問題以外に、直接的な子どもの生活空間上の問題が数多く存在している。例えば、共働きによる母親の不在、遊び場の減少、交通量の増大、生活の合理化、人工化による生の自然の減少といった問題は、都市における幼児教育機関で、幅広くより積極的にとりくまねばならないところであろう。

(名古屋市立保育短大幼児教育研究所)

